

交通反則告知書・免許証保管証(番号) 5C 455437

告知・交付日時 昭和60年9月25日午前午後1時20分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 高井 警52 係巡査倉田哲也

告知・交付日時 昭和60年9月8日午前午後4時30分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 西条 警52 係巡査倉田哲也

告知・交付日時 昭和60年9月18日午前午後3時13分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 西条 警52 係巡査倉田哲也

告知・交付日時 昭和60年9月18日午前午後3時13分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 西条 警52 係巡査倉田哲也

告知・交付日時 昭和60年9月18日午前午後3時13分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 西条 警52 係巡査倉田哲也

告知・交付日時 昭和60年9月18日午前午後3時13分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 西条 警52 係巡査倉田哲也

告知・交付日時 昭和60年9月18日午前午後3時13分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 西条 警52 係巡査倉田哲也

告知・交付日時 昭和60年9月18日午前午後3時13分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 西条 警52 係巡査倉田哲也

告知・交付日時 昭和60年9月18日午前午後3時13分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 西条 警52 係巡査倉田哲也

告知・交付日時 昭和60年9月18日午前午後3時13分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 西条 警52 係巡査倉田哲也

告知・交付日時 昭和60年9月18日午前午後3時13分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 西条 警52 係巡査倉田哲也

告知・交付日時 昭和60年9月18日午前午後3時13分

告知・交付日時 昭和60年9月8日午前午後4時30分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 西条 警52 係巡査倉田哲也

告知・交付日時 昭和60年9月25日午前午後1時20分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 高井 警52 係巡査倉田哲也

告知・交付日時 昭和60年10月5日午前午後18時

告知・交付者の所属階級等及び氏名 東京都立区伊藤町前沼120

告知・交付日時 昭和59年12月18日午前午後18時

告知・交付者の所属階級等及び氏名 東京都公安委員会交付

告知・交付日時 昭和60年9月24日午前午後10時

告知・交付者の所属階級等及び氏名 東京都杉並区上高井1-11-2

告知・交付日時 昭和60年9月18日午前午後3時13分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 西条 警52 係巡査倉田哲也

告知・交付日時 昭和60年9月18日午前午後3時13分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 西条 警52 係巡査倉田哲也

告知・交付日時 昭和60年9月18日午前午後3時13分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 西条 警52 係巡査倉田哲也

告知・交付日時 昭和60年9月18日午前午後3時13分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 西条 警52 係巡査倉田哲也

告知・交付日時 昭和60年9月18日午前午後3時13分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 西条 警52 係巡査倉田哲也

告知・交付日時 昭和60年9月18日午前午後3時13分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 西条 警52 係巡査倉田哲也

告知・交付日時 昭和60年9月18日午前午後3時13分

交通反則告知書 免許証保管証(番号) 5C 455437

告知・交付日時 昭和60年9月25日午前午後1時20分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 高井 警52 係巡査倉田哲也

告知・交付日時 昭和60年10月5日午前午後18時

告知・交付者の所属階級等及び氏名 東京都立区伊藤町前沼120

告知・交付日時 昭和59年12月18日午前午後18時

告知・交付者の所属階級等及び氏名 東京都公安委員会交付

告知・交付日時 昭和60年9月24日午前午後10時

告知・交付者の所属階級等及び氏名 東京都杉並区上高井1-11-2

告知・交付日時 昭和60年9月18日午前午後3時13分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 西条 警52 係巡査倉田哲也

告知・交付日時 昭和60年9月18日午前午後3時13分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 西条 警52 係巡査倉田哲也

告知・交付日時 昭和60年9月18日午前午後3時13分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 西条 警52 係巡査倉田哲也

告知・交付日時 昭和60年9月18日午前午後3時13分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 西条 警52 係巡査倉田哲也

告知・交付日時 昭和60年9月18日午前午後3時13分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 西条 警52 係巡査倉田哲也

告知・交付日時 昭和60年9月18日午前午後3時13分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 西条 警52 係巡査倉田哲也

告知・交付日時 昭和60年9月18日午前午後3時13分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 西条 警52 係巡査倉田哲也

告知・交付日時 昭和60年9月18日午前午後3時13分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 西条 警52 係巡査倉田哲也

告知・交付日時 昭和60年9月18日午前午後3時13分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 西条 警52 係巡査倉田哲也

告知・交付日時 昭和60年9月18日午前午後3時13分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 西条 警52 係巡査倉田哲也

西新井 警署 6:6:8:1

納付期限後に納付することはできません。現金、小切手、為替、収入印紙などの郵送は受け付けません。

納入通知書 兼 警察費弁償金 納入通知書 兼 警察費弁償金 納入通知書 兼 警察費弁償金

Personal Effects

この納付書は3枚組となっていますから3枚とも納付場所に提出してください。

西新井 警署 6:6:8:1

納付場所 日本銀行本店、代理店又は納入代理店。 納付期限 昭和60年9月25日限り

現金納付 上記の金額を領収しました。

現金納付 上記の金額を領収しました。

現金納付 上記の金額を領収しました。

現金納付 上記の金額を領収しました。

現金納付 上記の金額を領収しました。

現金納付 上記の金額を領収しました。

内訳 移動措置料 6,000円 保管料 2,000円 昭和60年9月18日 西新井 警署 長 警視山本政

★音なしの人たち・90 上目黒住区センター いっまで続く
10月26日(日) P.M. 1:30~5:00 いっものメンバー

★10月19日 ギャラリー・葉 パフォーマンス P.M. 2:00~6:00
(10月13日~25日 荒井真一 個展 期間中) 南青山2-2-15 ☎4754883
田中トシ・谷川まり・荒井真一・原田修三郎・乙部聖子・福本健修

わたしはワープロが嫌いだ。ワープロを全面的に否定するというわけではないが、ワープロは必要以上に普及していると思う。ワープロは、以下に述べる諸条件にあてはまる人だけが使っていれば良い。1、他人が容易に判読できる字を書けない人。2、自分が書いた文書をどうしても手元に残しておき後々までも、時には手直しなどして慈しみたいナルシスト。3、いつも膨大な文書に埋れて、整理が追いつかない人、或いはその状態にある事が快感になってしまった人。4、とにかく電子機器が好きでたまらず、何かスイッチやらボタンをいじくりまわしていないと落ち着かない人。(例えば、こういう人は仕事場でパソコンやワープロを使い、帰宅前にゲームセンターに寄り、家ではファミコンやってビデオソフトをダビングする。一種の電気トリック・フェティシズムである。) 5、なんでもいいから自分の書いた物を活字の様な字体にする事にあこがれる印刷物崇拜者。6、他人の書いたものを体裁整えてたくさん作り、金を貰う商売、つまり印刷業。要するに専門家と病気のひとだけが使っていればよいのだが、わたしの疑問と不安はこの日本に、そんなに多くの専門家と病気のひとが居るのかという事だ。(勿論、兼ねている場合もある。何かの専門家である事がビョウキを助長し、その逆も成立つ。一般に我々は常に何らかの病的徴候を持ち、また何かの専

2

門家でありつづける。) そんな馬鹿な、という人もあるでしょう。ええ、そうですよ。わたしは極端な事をいってるんです。しかし実際のところ次の二点を考えざるを得ない。一、システム化、OA化の部分としてのワープロ以外の、いわゆる民生品、あるいは家庭用ワープロはファミコンと同じ運命にある。それは出生時から定まっていた。つまり「つくられた需要」、「見せつけられた欲望の対象」である。新製品というものは、我々が欲する物では無く、「彼等」が売りたい物なのだ。日本語にワープロは不要だが、ワープロは日本語を必要としたのだ。二、日本語が基本的に表音文字のみでは記述され得ないと考えれば、アルファベットの様なタイプライター化、デジタルイゼーション(ここでは限定して、あらゆる表記を単純な幾つかの記号の組み合わせ、あるいは均質な操作に還元していく事としよう。)はその言語の性質の変化・変質を待ってはじめて可能になったといえよう。この変化・変質は非常に長い期間を経て達成された。その主な点をあげれば、以下の様になるだろう。1、シラブルの減少。2、言語使用における加速化。3、単語の増加、新生の多様化。4、漢語の持つ歴史的広がりや意味の過剰性が減っていること。5、印刷物の質的・量的な必要性の増加。といったところだが、例えば、5においては単に情報産業の発達ということだけでなく、社会のあらゆる側面でのシステム化と官僚化が進行していることが、その根底にある。ワープロは文書官僚主義と、印字崇拜、規格化信仰に奉仕し、一文字あたりの価格をひき上げ、よりコトバと記述の「差延」をうみだすことになる。しかも「差延」は自己増殖し、我々はそれを止める術を持たず、代りにひたすらそれに対して不干渉であろうとするのだ

。わたしは、自分がワープロフォビアである事の告白をするより先に、ワープロがもう一度提示してみせるテキストとエクリチュールの斥力、「差延」の暴力的増殖にまた目をつぶらなければならないことを恐れ、あるいは其の事態がまさしく眼前約30センチの画面から生起するという機会（機械）にマゾヒスチックな興奮を感じているのだ。磁気テープやフロッピーディスクに記録された磁束密度の変化、ブラウン管上の走査線、塩ビ盤上のインヴォリュートする小峡谷、画布上の顔料と油脂による電磁波の波長調節、こうした次元においては情報は無く、単にマテリアリティのみが配置～空間の支配～されている。これらが情報として読まれる為にはマテリアリティの自足を越えて、異なる系の間に関係性が生じているべきだ。「べきだ。」という表現になるのはこの関係性を核として機械状の欲望～欲望する機械としての情報機器が顕われるからだ。そして一方では原型フェティシズムより分化したマシナリーフェティッシュあるいはエレクトリックフェティッシュがアミーバ（運動するもの）として機器（危機）の彼岸へと触手をのばしてくる。触手がキーボードに達し欲望を欺いて情報に自己を投射するのは時間の問題である。（キーボードには御存知のとおりコード～暗号がならんでおり、パレットには絵の具がならんでいる。これを「配置された恣意性」といってもよい。）アミーバがキーボード（またはパレット）を覆いつくすと配置も恣意性も不可視となり、ヴィジョンのみがさまよいあるく。この「さまよい」を我々は「初期の自由度」とよぼう。一般にいう表現や解釈の問題はこの範囲で起こるといってよい。しかしそれは決して単純な問題ではない。何故ならば、事の契起は我々がマテリアリティ～配置を「空

間の支配」から「意味の支配」へすりかえる（象徴化しようとする）時点にかかってくるからだ。既にこの時、「初期の自由度」から逃れてた『機器とフェティッシュの接合体』（ドゥヴニールといってしまうところだが・・・）は切れば血の通る生身の体でありながら、欲望の彼岸でチェシャ猫の笑いになっちゃまってやがる。行為の結果としてのエクリチュールを読むことは常に差延化した二重性をはらんでいる訳だが重要なのは、まさしくこの二重性の源たる主体の意識の微分的変移が無意識化（あるいはラカンに反して無構造化、被風たてぬならアモルフといたい）していくことである。しかし、ここにこそ「成熟した自由度」の可能性も潜在している。それは以下にのべる理由による。（上記の）『接合体』はコードを覆いつくすことによって自らブラックボックス化していくが、その代償として顕性的な強度を失う。（ウィリアム・バロウズはカット・アップをワープロでおこなうだろうか？）機械の内部を支配する言語は合目的であるが、自然言語はトランスアクションによって形成された過剰性がメタ言語となるシステムをもっている。言い換えれば後者には使用価値と交換価値があるが、前者には使用価値しか無いという事である。また前者においては、過剰性はエラーとして「誤一機能」する。自然言語における「誤一機能」は『反技術』化、コンテキストのメタ化を主体に気づかせる。これは前述の「微分的変移」がメディア（マテリアルな、フェノメナルな、パラメトリック・システム）の関与により変節～主体の疎外～を余儀なくされている、ということだが。メディアはディスタンスを顕微鏡的に拡大する事と、望遠鏡的に縮小する事を同時に同現場でおこなっている。

<前ページ最終行からの行換え無し>「微分的変移」はディスタンスの加速度的伸縮の中でゼロへと収束していく。もしこれが逆に無限大へ向けて振動しはじめたら、あるいはディスタンスの伸縮と同期する変化率を持たば、メディアの拘束力は無化する。例えばシャーマンはトランスにおいてメディアとしての身体を再構築できるし(それ故シャーマンはメディア~霊媒たりうるのだ。)、非イデオマティックな志向の即興演奏はメディアとしての音楽を批判する可能性を持ちうる。(アート・リンゼイの非分節的ギター、AMMのスタティックなノイズ...)しかしそれらの例は主体への疎外を全面的に退けて「反-技術」のみによって成立しているわけではない。主体は分節化されつづけているのであり、「微分的変移」が脱属領化したかと思うと次の瞬間には再属領化されてしまう、という「せめぎあい」の場としてあるのだ。この「せめぎあい~メタ・レベルの浮上」をこそ「成熟した自由度」とよぶべきだ。実はここまでが疑似言語代償装置としてのワープロ批判の序章である。

(わたしは以前書いたスケルトン・クルーに関する評においても、自己流の疎外論に基く展開を試みたがその時点で経験したのは記述をすすめていくにつれて、自明であったはずの主体と疎外の関係性が曖昧になっていきそれらを通る言説自体もなにかモヤモヤしてくる様であった。しかしその状態から抜け出すと関係性は新たな様相と意味を帯びて見えてくるのだった。その変化を一言でいうならば、「たしかにシステムとテクノロジーは主体を疎外する。しかし主体とは疎外されることによって闘われるものである。」ということだ。少なくとも希流ナチュラルスト、えせヒューマンリストの懐古的・楽天的・復権論的レベルと同一視さ

れずにいるためには、この問題を強調してしすぎる事は無い。言語をはじめとして、あらゆるものがシステムとテクノロジーに支えられている。スケルトン・クルーとは別の意味で「もたらされたもの」としてのワープロを批判しなければならないのはこの理由による。)

(続く)

- ・横浜ポータルタワー(小栗判官)を藤沢遊行寺で小栗再生の場では百人の坊主の声明があつたというので見にいってから芝居の始まり前に20人位の続投があつたわけではなかった。内容も忠実に再現されたが教節で役者の個性も仮面によつて消す小セリフもうますぎて教科書を読ませているつまらなさを感じた。昔ながらのアンガウパターンとはいへ「夢-族」のようなエネルギーの方が楽しめた。で「風の旅団」(火の鳥)は悲しいかなつまらなかつた。役者それぞれ役どころが中途半端で話も表層を浮遊しているだけのつまらないもので消化不良。
- ・ピナバウレエ&アップタール舞踏団のダンスパフォーマンスの往來は悪くない。暗黒舞踏的振りは欲またからぬTVで山海塾をちやこやしてたけで今たにこれた。この番組はN・J・Pの企画たか何たか知らないけど必ひがた。ルーリードが出て驚いたけど(もう驚くことではないか)。小杉武久・川仁宏・竹田賢一後半饒また小杉さんのハイオリンは美しい。終わったあとの飲み屋でのK氏の話芸を楽しむ。公民館運動場並場所の打ち上げではM氏の話芸を楽しむ。話の上手な人がうらやましい。「音なしの人たさよ」2部・谷川・荒井トリオ面白かつた(自画自賛)こういう形のものはやはり時間の制約を考へない方がいい。

な気分にならざる、叙情的な物を見、物を語ることのロバが2つを2つに
よすが、ピンボケも、露出変化も、コマ撮りも、2重写しも、パニングも全2計
算づくでこれだけのなと交付した。でたあめ、好い加減にやていの2はな。い。
この場、この時、メカが瞬発力でも、眼前の光景の最も気になる美しい形を、
気になるスピード操作で切り取るのを。気になるランボルギーニのようなカメラをあ
つりメカ。ほんていカメラと一体化している。眼前の現実に対して、映画の自動
機械になったかのよう、睡眠的の反応し、動いていくメカ。常人ではない、撮
らぬという被写体は、喜ばしげな表情、リアスした表情が多く、ナチュラルで、上向
きが多く、空がたかさん入っている。開放的な気分になら。う、むしろ詩的な
気分になら。メカのランボルギーニが体なきまのこの慣れこめは、どうぶつ引き
込まれまわら。自分の眼が、映画の中を自由自在に動いていけるかのような
陶酔境に入れた。終わらも、叙情的で美しく、きびきびした動きの世界が
抜けるはず、外の街中がニューヨークに見えてきた。

9月16日、「自己切断」(16mm、キョウゴ・ブルス) 自分の傷口をたがえていくマツヒステ
ックの快感。G・ブルスがマツヒステックなのと比べて、オット・ミュールは肉体に
してサテニステックな点が異なると思つた。

9月21日、「山谷、やされたヤリかえせ」(16mm、佐藤満夫、山岡隆一)
(P.E. '86. 2月号で乙部氏が、3月号でG.E.S.C.氏が触れられた) 労働者連
集団の何人をも一座に捉えていくカメラが荒、ほんてい面白かつた。闘争が
あつた、工場現場で働く姿も撮、こののが面白い。宴会の時の労働
者の表情もいい。しかし、後半、筑豊まで行くのは映画のイメージを壊
している。(寄せ場の歴史的探求という意図は理解できるが...) 寄せ場の
このたのこつくりよを背景にした労働者の怒りやあつた表情と置まかこの映
画のゴツゴツしたメインイメージなのと...。もてアクションがあつたかと期待し
ていたが、どうもなかつた、手配師の詰り場面が主だった。構成の敵慢
さも見え。イメージ的には荒々しいのがいい。この手のキョウゴ・ブルスを見る時
には、「映画を見ただけだ」「自分は参加しない」という安心な「お勉強の傍観者」の立場になりやす
い、この映画にはそれを揺るがす荒々しさがあつた。監督が2人と殺されている危険な現

場からはほど遠い安全圏に自分がいることを、強く意識させられた。
上映場所の部活解放センターといふ、上映後の「差別語としての「労働者」のフ
ィルの講演といふ、船本洲治への言及とこの著作といふ、無知な僕には十分
おとしげな非日常であつた。で、この備物をも過去形で標本化してよやく
安心するひ弱な自分がいるのたつた。

○ P.E. '86. 9月号(先月号)には、「僕の乙部氏のフィルムへの感想」に対する乙部氏
からの返答があつた(「乙部のコーナー」一番下の行)、納得できた点もあつた。
しにこの点もあつた。「あつたものを客観的に見れば、この世の中に気持ち
悪いものやとつものはない」という思想は、僕が乙部氏のフィルムの中
に見出した「認識とイメージが乾いていく」といふところを思ふ。月並いと思
う。これでもやはり、「これは何故乙部氏はあつたの被写体を選
ぶのか? 選ぶ時の基準は何なのか?」といふ疑問が湧いてくる。乙部氏の
フィルム製作時の内面の吐露も聞きたいとも思ふが、いま言葉でかめ
ておとしまらなうといふ予想もある。しすめれば、僕は偏見を変
態でこり固まつており、J・カレル氏のようなナチュラルリストからほど遠いよ
さです。

〒662 兵庫県西宮市甲陽園西山町5-30 (0798) 71-5310 大谷 淳

空間恐怖症の癖あり。余白があつるとついで何か書か
ずにはいられない。もたないないという感いでもあつた。
部屋においても同様でいるんなものかちからしている。
でもたまにかたづけると気持ちがいいとも思ふ。
映画においても同様で雑々とした風景、シリアスな
映像にあまり興味をもてない。映画はいつくり箱のよ
うなものという思いがあつた。僕は単純な人間なので単
純に驚かせてもらうとうれしい。美しい(と思われている)
わけの對象を見より面白い(と思われている)ものを見
せつける小づか僕ほうれしい。

☆PEのTS氏のコンセプト・アートを見て、昔書いたメモを思い出しました(同封のコピー)。もうやめたいとは思っているのですが、今でもチケットとか半券をとときどき保管してしまうのだった。

☆『エイリアン 2』を観た。面白い。シガニー・ウィーバー(だっけ?)カッコイイ! それから、『死霊のえじき』を観たことは手紙に書き忘れてたけど、あれは確かにポリシーがあって良かった。納得できる終末観。『エイリアン』でも『死霊』でも、出てくる男は総じて情けなく、悪夢に悩まされながらもそのネタと闘って克服するヒロインの動きが目立つのは最近の傾向みたいね(「女性映画」と評する人もいたな)。『エイリアン』のほうは話自体は単純明解で、アクションとバイオレンスに徹してたけど、ランボーだのロッキーみたいな米国万歳主義が無い点は気持ち良い。『ターミネーター』に近い壮快さ。(同じ監督の作品であることを後に知った。……どうりで最後に生き残ったマザー・エイリアン(?)のしつこさもターミネーターに似てるわけだ。)

☆『フィメール・トラブル』は『ピンク・フラミンゴ』に較べれば、ストーリーも描写も普通っぽかったが、ディヴァインの魅力で楽しめた。彼(女)が、クリシュナに入信した自分の娘を「気持ち悪いね!」などと罵倒しながら絞め殺すシーン(思わず溜飲が下がってしまったところを見ると、僕はクリシュナさんが嫌いらしい。)だとか、ライブで「誰か芸術のために死ぬかい?」と尋ねて「死ぬるとも!」と応えて立ち上がった観客を即座に射殺するシーンだとか、喜々として電気椅子で処刑されるラスト・シーンだとか、気に入った場面はいっぱいある。(2番目のシーンに続くパニック・シーンで、「観客を殺傷したのは駆付けした官憲どもで、ディヴァインは最初の1人を撃っただけだ。」と、サヨクのYK氏はサヨクらしい指摘をした。なるほど。)

☆倉橋由美子『アマノン国往還記』: SFとしては陳腐なアイデアだと思うが、“ニガヨモギのインクで書いたような”手だれの文章で一気に読ませる。/A.ワイル、W.ローセン『チョコレートからヒロインまで—ドラッグカルチャーのすべて』: 良いドラッグ・悪いドラッグという区別は無く、ただドラッグの良い使い方と悪い使い方があるだけだ、という、まああたりまえと言えばあたりまえのことを主

張している。意識を変えたいという欲求は正常だ、どんなに法律で規制しようとドラッグ使用が無くなるとは考えられない、だったら、正しい知識に基づく正しい使い方を親も子供も勉強して、ドラッグと有意義なお付き合いしましょうよと、プラグマティックにデモクラシックに啓蒙して、いかにもヤンキーのヒッピー上がりを書いたって感じの本。ケッ、ほどほどに終始して面白いかよ、ただ酔うために酔ったっていいし、乱用して死んだって別にいいじゃねーか、と言いたい気もするが、ミもフタもない考え方ですいません。ちなみに、僕はマリハナよりタバコのほうを好み、最近フィッシャーマンズフレンドという辛いミントキャンディの中毒で、よく酒で風邪薬を飲んだりしますが、適度にシャブをたしなむほうがヘルシーだらうか。/赤塚不二夫他『フォーカス、フライデーの愛読者に贈る本』: F・F・Eを批判する各界著名人のコメントを集めた本。個々の発言内容は大同小異・異口同音で、弱い者いじめ・人権侵害・品性下劣・報道の逸脱・死者への冒瀆・報道の自由の履き違え・ジャーナリズムの墮落・etc... (正論の畳み掛けというの、意外に疲れる。)ともかく、作るほうにも喜んで読むほうにも非があること、良くも悪くも最も現代日本のメディアであること、は言えそう。有効な批判手段としては、読まない・買わないに尽きると思う。僕は正義感からというんじゃなくて、写真が面白くないから、ほとんど見てない(キャプションは、写真とはどうせ無関係だと割り切っているし、十中八九、読むに堪えない文章なので、ほとんど読んだことはない)。買ったことはなく(拾ったことはあるな)、読むのは喫茶店ぐらいです。/『ダブル・ノーテーション No.3』: 浅田氏は性能のいい要約機械だ・60年代へのノスタルジーが坂本氏と平井氏の緩衝として機能している・大里氏のページには誤植が多い・それにしてもスノップな作りだぜ、etc... 古本屋購入価格700円相当の感想。/遅ればせで読破した『ドグラ・マグラ』はどうして期待したほど面白くなかったのか、とか、現代詩はなぜつまらなくなったかを考察する荒川洋治(もつまらないが、『すばる』7月号)・それを引用して「問題のない時代」(冗談でしょ。)を語る高橋源一郎(っていいと思う?)と川崎徹(飽きた。)の対談(『広告批評』8月号)・PE17号、etc... を読んで言葉と即興について考えたこと、などは、次回元気があったら書くつもりですが、今日はもう寝よつと。

19860910

僕もチケット・チラシなどの保管癖あり。コピーを見出し出したの切符で東京路線地図を作製していたものを採したか行方不明。

15年位前に買ったドグラ・マグラをまだ読んでいない。埋まっている本は他にも多い。本をオブリエとして偏愛する癖あり。今や利用する図書館は5つになっているが当然すべてを読了しているわけではない。

10月13日(夜9時~11時)下北沢 ラジオ・ホームラン

大里俊晴、小山博人、鈴木健雄、園田佐登志、藤本和男

《四分五裂放送局》

